

# 厦門の石敢當

井上智勝

## 序

石敢當は、中国に起源を有する避邪の呪物である。ただ、その分布は中国に留まらない。越南や日本でもその例が知られ、華僑の活躍する世界各地にも伝播している。日本では特に沖縄のそれが著名であるが、南九州をはじめ各地に分布する。石敢當は、東アジアの文化交流を跡づけてゆくための重要な証左であるとともに、東アジアの宗教・信仰を考える上での有益な素材である。

したがって石敢當についての研究は、日本では主に琉球・沖縄研究の相貌を色濃く具えつつ、東アジア、就中中国との文化交流研究として展開されてきた<sup>(1)</sup>。だが、日本における中国側の事例の認知度は未だ多くはない。石敢當を素材に東アジアの文化交流を論じるためには、なお中国側の豊富な事例の提示が要請されていよう。

筆者は、平成二十八年（二〇一六）度、海外研修の機会を得、四月から六月までの三ヶ月間、中国福建省厦門市に在る厦門大学を拠点に、主に中国の祠廟の実地調査に従事した。その過程で、図らずもいくつかの石敢當を目にすることになった。

厦門の石敢當については、夙に敗戦以前に日本向けの紹介があり、戦後にもこれに言及した研究がある。だが、それらは厦門の石敢當の

\*いのうえ・ともかつ

埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授

総体的な紹介で、個々の石敢當に対する基本的な情報を欠く場合が少なくない。例えば、海江田正孝は、昭和十八年（一九四三）、旧厦門市内で六五基の石敢當を確認し、その報告を行っているが、所在地やその環境、法量などの基本情報についての提示は不十分である<sup>(2)</sup>。窪徳忠も、昭和六十年（一九八五）に厦門を訪れた際に石敢當数基を認めているが、やはり基本情報は示されていない<sup>(3)</sup>。海江田の研究以降は言うまでもなく、窪の来訪以降も、厦門は大きく変貌している。特に現在、厦門を含む中国の大都市は、凄まじい勢いで開発を進行させている。このような開発の過程で、石敢當のような古い街巷の路傍に佇む文化財が失われたり、本来の所在地に変更を来される場合は少なくないであろう。厦門市の北隣、泉州市の石敢當を調査した王亦錚によれば、厦門よりも経済規模が小さい泉州市においても、そのような傾向が顕著であるという<sup>(4)</sup>。

かかる現状に鑑み、本稿では筆者が厦門滞在中に遇した石敢當についての調査報告を行う。石敢當との密接な関係が指摘されてきた石獅にも、関連する範囲で言及する。勿論、筆者が偶然目にした数例のみを対象にする本稿は、到底体系的な調査報告にはなり得ない。ただ、国や地域の境を超えた東アジアの学術交流と、それを通じた相互理解・相互協力を推進してゆくための捨て石になれば、と願う。

## 一 石敢當

### (1) 厦門中心部

厦門島の南西部に展開する厦門の中心市街のうち、本部巷・草埔巷・石頂巷付近には、石敢當とそれに類する石造物が比較的濃密に分布している(図1)。

まず、本部巷を貫く道が、橋亭路―四仙街・石壁街―釋仔街を貫く道に突き当たる場所にある石敢當を掲げる(写真1)。「石壁街98」と記された標札が貼られた家の壁面の、向かって左端下部角に嵌め込まれている長方形の石に、陰刻された「石敢當」の文字が認められる。文字に彩色は認められない。

石の法量は高さ六四・五糎×横一六・五糎×奥行八・〇糎である。

そこから左折する

と、ほどなく四仙石の祭場がある。四仙石とは、立方体をなす石の四面に各々正面を向く仏像を彫出した霊石である。その祭場の向かって右側に、やはり「石敢當」と陰刻された四角い石が壁面に嵌め込まれている(写真2)。法量は高さ六七・〇糎×横一八・五糎で、文字は

図1 本部・草埔・石頂巷の石敢當・石獅所在地略図

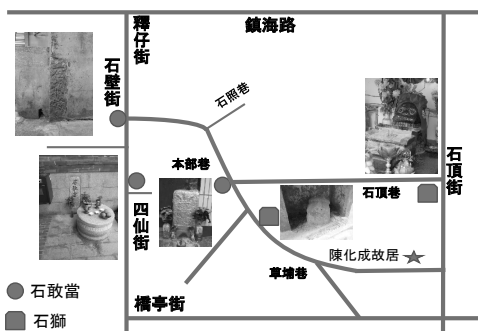


写真1 厦門石壁街の石敢當

赤く彩色されている。石製の供物台が備えられており、線香や飲食物が供えられている。祭祀の対象になっていることが諒解される。ここは、道の突き当たりなど、特徴ある立地条件下にはない。当該石敢當の向かつて右側数メートルの場所には奥に延びる道があるが、ほどなく人家に突き当たり、行き止まりになる袋小路である。

以上の二基は、「石敢當」の文字が認められるため、容易に石敢當と判断できる。ただ、石頂巷を貫く道に突き当たる「美桂殯儀服務点」の向かって左端下部にある石造物(写真3)は、その記載がないために、俄にそれと判断できない。ただ、「美桂殯儀服務点」の住人によれば、これは石敢當であるという。本体は銀色、下部は黄色、周囲はタイル貼りの部分を除いて赤く彩色され、庇が施されている。前部には花瓶と線香が供えられ



写真3 美桂殯儀服務点横の石敢當



写真2 四仙石横の石敢當

た香盆があり、祭祀の対象になっていることが明瞭である。本体の法量は高さ七・〇糎×幅三七・〇糎×奥行一〇・〇糎である。文字はないが、模様が陽刻される。模様が何であるかは判断できない。「美桂殯儀服務点」の住人からは、線香を供えるのは当該石造物を釈迦と同じように考えているからだ、との話を聞くことができた。なお、道が突き当たる場所にある「美桂殯儀服務点」の正面看板には、八卦図が吊り下げられていたことも付言しておく。八卦図は、写真4の「儀（儀）」の字の「父」の右上に認められる。

## (2) 曾厝按

廈門島の南部、廈門市思明区曾厝按二六〇号にある蔡氏邸は「金門蔡府」と呼ばれ、現在では観光客で賑わう曾厝按にあって一般に公開されている。蔡氏は金門島に原籍を持つ名門で、明末に出た蔡復一は文人官吏として著名である。「曾厝按漁村文化館」「蔡復一兵部尚書府」と標札が掛けられた門から邸内を東北方向へ向かう道と、母屋の前を東南から西北に走る道が交わる地点の西北側に、「石敢當」と陰刻され、赤く彩色された文字を有する石敢當一基が認められる(写真5)。法量は高さ六三・〇糎×幅二一・〇糎×奥行一一・〇糎である。



写真4 美桂殯儀服務点と石敢當

向かつて右隣には、新しいものであるが獅子の石像が置かれている。なお、曾厝按など廈門の観光地では、獅子に石敢當と記した土産物が販売されているが、これらは沖縄で見られるものと近似している。

## (3) 浦口社

廈門島の東北部、浦口社王氏家廟の東北角に、二基の石敢當を認めることができた(写真6)。王氏家廟は南面しており、東北に相当する向かつて右奥の角に石敢當が設置されていることになる。この場所は、王氏家廟の西側から延びてきて家廟の北壁面に沿う道が突き当たりとなる地点で、この道と、家廟の東壁面に沿って南北に走る道が丁字に交わる地点である。加えて、東南から延びてくる道が家廟の東北角からやや南にずれた地点で家廟の東壁面に突き当たる地点である(図2)。

図2 浦口社・風頭社の石敢當所在地略図

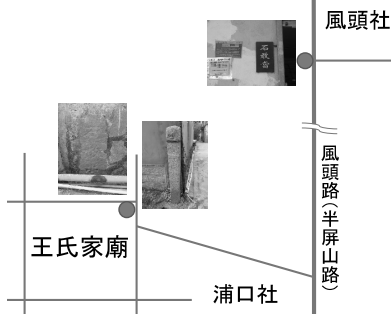


写真5 曾厝按蔡氏邸内の石敢當

一基は北面して、家廟下部の石垣に埋め込まれている（写真7）。法量は高さ六三・〇糎×幅二四・〇糎である。もう一基は東面し、家廟から独立している（写真8）。法量



写真6 浦口杜王氏家廟石敢當二種

は高さ一六一・〇糎×幅二一・〇糎×奥行一五・〇糎である。東南方面から延びてくる道の真正面には位置せず、わずかに北にずれて家廟の東北角に立っている。頂部に顔面が陽刻されており、その下に「石敢當」の文字が陰刻されている。向かって右側面、頂部から三八・〇糎のところから「来龍進寶」の文字が陰刻されている（写真9）。



写真7 浦口杜王氏家廟角北面石敢當

他の面に文字は認められない。頂部の顔面については、石敢當の頂部に獅子頭を刻する例が数多く報告されていることからみて、獅子



写真8 浦口杜王氏家廟角東面石敢當

頭と理解するのが妥当かもしれない。顔面の高さは概ね二五・〇糎である。材質は花崗岩である。作成年代は不明ながら、筆者が遇目した石敢當の中では、最も古いもののように思われる。

王氏家廟の東隣に居住し、本廟の管理を任されているという林姓の女性によれば、悪い物が来ないように設置している、とのことであった。避邪の機能を担っているのである。



写真9 来龍進寶



(4) 風頭社

浦口社の北隣、風頭社でも石敢當が認められた(写真10)。  
高さ三四・八糎×幅二〇・〇糎  
×奥行一・五糎で、黒色の石材に「石敢當」と陰刻した文字が金色で彩色されている。ごく近年の製作にかかるものであることは、一見して明らかである。  
風頭の集落を南北に貫く風頭路(半屏山路)と、東側から延びてくる道が丁字型に交わる地点の道の真正面「風頭社43」と表示のある町工場の壁面に設置されている。



写真10 風頭社町工場の石敢當

(5) 翔安新蓮路

廈門島の対岸、大陸側の廈門市翔安区では、新店から茂林へ抜ける新蓮路沿いに、三基の石敢當が認められた(図3)。いずれも一見して、作成されてから時を経ていないことが



写真11 翔安陳塘集落西口の石敢當

諒解される。まず、新蓮路と翔安東路、新店路が五叉路を成す地点の東南角に一基の石敢當が認められた(写真11)。高さ一二・五糎×幅四八・〇糎×奥行九・五糎の花崗岩に「泰/山石敢當 安/鎮」(5)の文字が陰刻され、文字は赤く塗られている。上部は布で覆われているが、その下に符仔頭「✓/✓/✓」が陰刻・朱塗されている。他の面に文字や記号はない。

これと同一

じ石敢當が、新蓮路を茂林方面に進み陳塘の市街が切れる場所にある消防署(新蓮路一九)前に認められる(写真12)。



写真12 翔安陳塘集落東口の石敢當



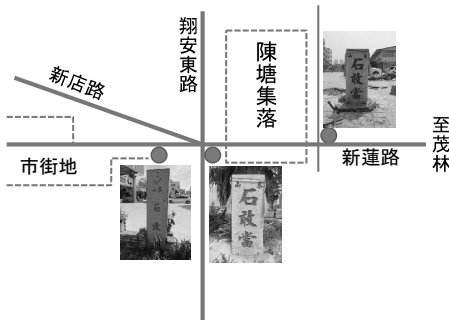
写真13 翔安新蓮路翔春木業前の石敢當

翔安東路を横切り新蓮路を新店方面に進んだ新蓮路二〇七・二〇九番地を占める「翔春木業」の前庭にも、一基の石敢當が建つ(写真13)。前述の二基と意匠は異なるが、やはり近年の制作にかかるものである。正面に「泰／山 石敢當」の文字が陰刻され、赤く塗られている。その上部には「、、✓」の呪符が陰刻・朱塗されている。他の面に文字等はない。法量は、高さ一八八・〇糎×幅四八・五糎×奥行一二・五糎である。碑石が地面と接する「當」の字の前にはビニールで囲まれた砂堆が形成され、その前に香炉一基と赤色の蠟燭二本が設置されている。明らかに祭祀の対象となっている。砂堆には「泰／山 石敢當」と黒字で記された木牌を中心に、向かって右側に二本、左側に三本、都合五本の小旗が立てられる。小旗は、向かって右端の黒以外は白く



写真14 翔安新蓮路翔春木業前の石敢當木牌

図3 翔安新蓮路の石敢當所在地略図



見えるが、黒色の隣のものとはわずかに赤味を残しており、左から二番目のものは黄味がかったている。褪色以前は彩色された旗が立っていたことが推察される。碑石前の向かって左の叢中には、廃棄されたとみられる古びた木牌が横たわる(写真14)。文字は黒字で「✓／✓／泰／山 石敢當 安／鎮」、法量は高さ二九・五糎×幅三・〇糎×奥行一・〇糎で、現用のものと概ね同じ大きさである。「✓／✓／」という符仔頭は、五叉路や陳塘集落のはずれで見られた石敢當の上部に記された符仔頭と同じである。したがって、ここの石敢當碑石に記された「、、✓」という符仔頭も、「✓／✓／」と同様の意味を持つと理解してよからう。この符仔頭は、「三清」すなわち「靈・靈・霸」で、道教の最高神「玉清元始天尊」「上清靈宝天尊」「太清道德天尊」を象徴するという。

「翔春木業」の住人からは、この石敢當に関する様々な話を聞くことができた。当該住人によれば、石敢當は避邪の機能を有するが、それ以外にも界牌としての機能を有するという。現在では地名が新蓮路に統一されているが、かつて翔安東路の西側は新蓮村、東側は陳塘村であった。「翔春木業」は、新店方面から続く家並みが途切れる場所であり、村の境界と認識されていた可能性が高い。かたや、五叉路に所在する石敢當の位置は、陳塘村の西の入口であった。石敢當が村の界牌とし

て機能したという理解は、十分に説得的である。消防署前の石敢當は西側から続いてきた陳塘の家並みが切れる場所であるから、ここもまた村の東の入口と認識されていた可能性が高く、石敢當は東隣の溪尾村との界牌の意味を有したことが推察できる。また、「翔春木業」の住人によれば、石敢當は神・祖先でもあり、当地の石敢當の命日は農曆の五月十六日であるという。

#### (6) 厦門大学構内

厦門大学構内の勤業餐厅の西側、敬賢二号棟の一階にある記念品専売店「厦大印象」の入り口、向かって左側の赤煉瓦柱に「泰山」[山の図]の陰刻が認められる(写真15)。刻成は、巧みとはいえない。「石敢當」の文字はないが、「泰山」の文字から石敢當と考えて差し支えはない。しかし、戯作の可能性も捨て難い。



写真15 厦大印象前の「泰山」刻字

## 二 石獅

石獅と石敢當の密接な関係は、しばしば指摘されてきたところである。厦門には、石敢當と石獅の密接な関係を示す事例も認められる。

#### (1) 同安

厦門市の大陸側、かつての同安県城が所在した同安区の中心部、三秀路と同新北路の交差点の西南に「青石獅」と呼ばれる石獅像がある

(写真16)。獅子の全身像で、緑色を基調に彩色されている。像高は七〇・〇㎝で、頭部から後ろは信仰者が寄進した外套で覆われている。石製の台に載せられており、台は高さ七〇・〇㎝×幅六〇・〇㎝×奥行一〇五・〇㎝である。像が載る台の前には別に石製の台が設けられ、その上に香盆と蠟燭が載せられている。祈願者は、ここに線香を供えて祈願するが、線香等は当該台の下部に収納されている。偶々、祈願をする女性があつたので祈願内容を尋ねたところ、住んでいる建物の前にあるので、出かけるときに安全を祈る旨の回答を得た。この台の向かって右側面に「青石獅爺簡介」が刻まれる。その文は、次のとおりである。

#### 青石獅爺簡介

青石獅爺爲三秀街劉大厝門口埕鎮煞一方的守護神、由于舊城改建



写真16 同安の青石獅

于二〇一二年以原貌守鎮于現址。青石獅傳承人劉啓源承前啓後、捐資重粧、謹此立碑爲誌。

閩臺風獅爺信仰于2009年6月已列入福建省非物質文化遺產保護名錄。

壬辰年荔月

L O R D   L I O N   B L E S S   Y O U   S I N C E   1 1 4 8

ここからは、この石獅がもともとはこの地の劉氏邸の門の守護神であつたこと、同安地区の改修工事に伴つて二〇一二年に現在の位置に再建されたこと、この像が風獅爺と呼ばれるものの一つであること、起源が一四八八年にまで遡及すると考えられていること、などの情報を得られる。

香盆台の正面に「青石獅」（上部）「石敢當無量是佛」（向かつて右）「獅爲神求必應」（同左）の文字がある。この青石獅が石敢當と不可分の関係にあることと、石敢當が「佛」とも不可分の関係にあること、それは現世利益をも叶えてくれる「神」であるという認識が認められる。石敢當を「佛」とする認識は、前述の廈門中心部「美桂殯儀服務点」横の事例を想起させる。

## （2）廈門中心部

廈門の中心部にも、石獅像がある。石頂巷の石獅像は、小さいながら廟の体裁を成し（写真17）、近在の人々の祈願を受けている。廟は、「美桂殯儀服務点」前から延びて石頂巷を貫く道が石頂街に突き当たる丁字路の向かつて右角に所在している（図1）。「美桂殯儀服務点」横の石敢當と対称の位置に所在することになる。だが、これは近年整備された結果らしく、昭和六十一年（一九八六）に本廟を調査した下野敏見や、二〇〇七年に刊行された叶涛の著作に掲載された写真<sup>⑥</sup>では、当該石獅廟は現在と異なる環境で、異なる建物に奉斎さ

れている。下野や叶涛の調査時点では、当該石獅像の廟は石頂巷の道が丁字路で建物に突き当たる場所に設置されていた。また、海江田正孝によれば、この石獅像は日中戦争勃発直後は、石壁に浮き彫りのように頭部が出ているだけのものであつたが、昭和十五年（一九四〇）頃に廟が作られたという。ただ、海江田が目にした廟は現在のものとは勿論、下野・叶の調査時点よりも粗末なものであつた<sup>⑦</sup>。

石獅像の法量は、高さ五〇・〇糎×幅三三・〇糎×奥行四〇・〇糎である。全体は黒、口は赤、齒は黄、目は金で彩色がなされ、赤い被り物が掛けられている。同安の石獅像と違い、頭部だけの獅子頭である（写真18）。「美桂殯儀服務点」の住人の話では、この石敢當とこの「石獅王」は兄弟であるという。また、廟内の注意書きによると、この「佛像」は五百年の歴史を有するものであるという。通りがかった近在住人に尋ねると、祈念内容は平安・進財、農曆八月十三日はこの像の命日なので祭祀を行うということであつた。

草埔巷から本部巷に抜ける道の途上にも石獅の頭を祀る小祠があり、線香を立てるための香盆が地面に彫り込まれている（写真19）。石獅頭の法量は高さ二〇・〇糎×幅一八・〇糎×奥行二〇・〇糎で、立方体に近い。現状では、一見したところ石獅頭自体に彩色は認め難



写真17 廈門石頂巷の石獅廟



写真18 廈門石頂巷の石獅像

いが、小祠の内部は赤く彩色されていると認識される（写真20）。しかし、叶涛の調査時点では、石獅頭は黒を基調に目は金、鼻孔と口は赤で彩色されていた。また現在のものとは違うが覆屋も赤く塗られ、上部の壁には「王」字が朱書されていた<sup>(8)</sup>。石獅頭を熟覧してみると、鼻孔と口の赤い塗料の痕跡がわずかに認められた。「美桂殯儀服務点」の住人によれば、この石獅頭も石敢當であるが、現在では祀る者が無いという。ただ、数本の新しい線香が香盆に立てられているところからは、わずかではあるが信仰者があることが伺える。叶涛の調査時点では、未だ多くの信仰者があったとみえ、金色の線香立に多数の線香が立てられていた<sup>(9)</sup>。この石獅頭に対する信仰は、ここ十年で著しく衰退してしまったといえよう。

当該石獅頭の所在地は、道路の突き当たりや交差点ではなく、特段

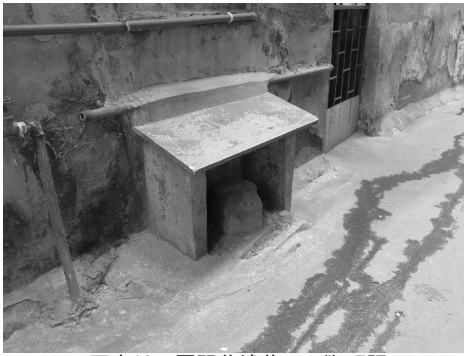


写真19 厦門草埔巷の石獅頭祠



写真20 厦門草埔巷の石獅頭

特徴のない路地の側である（写真21）。強いていえば、道が少し曲がり始める地点であることと、相互に隣接する二軒の家の入り口の前に所在する点が特徴といえる。ただ、同じ道には他にも彎曲する場所があるが、かかる石獅頭や石敢當は認められない。

(3) 漳州市詔安県南詔鎮  
東城村功臣廟内石獅  
爺公廟

最後に石敢當との関係は未詳ながら、厦門市の西南隣、漳州市詔安県南詔鎮東城村に所在する功臣廟にある石獅爺公についても紹介しておく。

功臣廟の向かって左横に「石獅爺公」の廟がある。眉間に「王」の文字を持つ石獅で、顔の他に前肢が造形されている（写真22）。赤・黒・青・緑・金など極彩色で塗装されているほか、頭部両側面には金属製の装飾具が付けられている。白い



写真22 漳州市詔安県南詔鎮東城村功臣廟内石獅爺公廟内石獅像



写真21 厦門草埔巷の石獅頭祠の所在環境

壁面から浮き出すように、廟内に設置されている。本像には「石敢當」の文字もなく、石敢當との関係は不明であるが、「石獅爺公」の廟は功臣廟とその西側に隣接する関帝廟・東城南壇功臣廟管委會の建物の間に通じる路地の突き当たりに所在している。

## 結

以上、きわめて断片的ながら、厦門滞在中に筆者が遇目した石敢當について紹介した。海江田や窪はともかく、叶涛が目にながら、筆者の目に入らなかった石敢當もあり、不十分な調査報告との誇りは免れない。ただ、石敢當が辟邪の機能を有することや石獅と不可分の関係にあることはもとより、佛や神との近さや、界牌としての役割を持つと認識されていることを確認することができた。

本稿では石敢當、およびそれと不可分に連関する石獅についてのみ取り上げたが、似たような意味を持つと思われる石製呪物は、厦門に少なからず存在する。例えば、本部巷・草埔巷あたりには、写真23のごとき石造物が認められ、厦門中心部の后海墘巷の丁字三叉路には、浦口の王氏家廟の石敢當を想起させる石柱（写真24）が認められる。



写真23 厦門草埔巷付近の巷角に立つ石造物

いずれにも文字や模様はなく、沖縄のビジュアル信仰を彷彿とさせる。石柱付近の「泰安街」の入口<sup>(10)</sup>（写真25）には、支柱の根本に仏塔を具えた小さな祭場が設えられ（写真26）、上部の壁面に「平安祝是福 惡有惡報街」と判読し得る文字が記されている。また、后海墘巷には、門の左右に石獅を具える家もある（写真27・28）。

風頭路（半屏山路）に沿った浦口社の南入口の廃廟の前に「安／鎮南宮」（写真29）、風頭社の會堂宮西横に「安／鎮 中宮」（写真30）と記した石造物が認められた。東西南北中の各「宮」から成る「五宮符呪碑」と呼ばれるものの一環とみられる。このほかにも、いずれも近年の設置にかかるものであるが、湖里区田里社の丁字路の角に八卦図を記した石造物（写真31）を、環島幹道から田頭社に入る場所や、湖辺社付近の仙岳路沿い、湖辺から田里・前頭方面に抜ける道の入口に「南無阿彌陀佛」と記された石造物（写真32・33・34）を認めた<sup>(11)</sup>。

以上もまた、断片的な例示



写真25 厦門后海墘巷泰安街入口



写真24 厦門后海墘巷に立つ石造物





写真27 厦門后海墘巷家宅前の  
一対の石獅 向かって右



写真28 厦門后海墘巷家宅前  
の一対の石獅 向かって左

に過ぎないが、厦門の石敢當の性格は、これらの石造物を含めて総合的に検討されることで、より明確になるはずである（12）。

石敢當の説明をしてくれた話者の中には、十代の青少年も複数あった。石敢當の文化は、確実に次代に受け継がれている。都市が近代化することで、名もない文化財の滅失の危機は高まるが、かかる文化が若い世代に継承されている実態があった。石敢當は、確かに現在の厦門に息づいているのである。



写真26 厦門后海墘巷泰安街入口  
の小祭場



写真29 浦口社南入口の五宮符呪碑 南宮



写真30 風頭社會堂宮前の五宮符呪碑 中宮



写真31 八卦図が描かれた石造物 田里社



写真33 仙岳路の南無阿彌陀佛碑 湖辺社付近



写真32 田頭社入口の南無阿彌陀佛碑



写真34 湖辺社から田里社へ向かう道の入口の南無阿彌陀佛碑

## 註

(1) 窪徳忠『沖縄の習俗と信仰 中国との比較研究』(窪徳忠著作集四 一九九七年 第一書房、初出一九七一年)、下野敏見『ヤマト・琉球民俗の比較研究』(一九八九年 法政大学出版局)、

山里純一『沖縄の魔除けとまじない』(一九九七年 第一書房)、同『呪符の文化史―習俗に見る沖縄の精神文化―』(二〇〇四年 三弥井書店)、周星『中国と日本の石敢当』(『比較民俗研究』七 一九九三年) など。

(2) 海江田正孝「厦門に於ける石と驅邪」『民俗臺灣』三一(通卷二〇)一九四三年。なお、海江田は基本情報を有していたが、

敗戦後の厦門引揚時にその全てを断腸の思いで廃棄したという(同「石敢当雜記」『民俗研究』五一 一九七〇年)。

(3) 窪徳忠「石敢当・石獅と風獅爺」『東方学』七二 一九八六年  
(4) 王亦鏞「福建泉州の石敢当について」『南島史学』七二 二〇〇八年

(5) 「」は割書部分の改行を表す。以下同じ。

(6) 前掲(1) 下野著書。叶涛(葉濤)『泰山石敢当』(二〇〇七年 浙江人民出版社)、四〇頁。

(7) 前掲(2)「厦門に於ける石と驅邪」、三島格「獸牌について」『民俗臺灣』一一三(通卷三) 一九四一年

(8) (9) 前掲(6) 叶著書、四一頁。

(10) 門榜石に「民國四年 泰安街」の陰刻記載がある。

(11) 「南無阿彌陀佛」と記された石造物は、交通事故死者の追善・鎮魂とは異なり、石敢当と同列視されている場合がある(三島格「石敢当考」『民俗臺灣』二一一(通卷一七) 一九四二年、黄文博『南瀛石敢当誌』二〇〇二年 台南縣文化局)。

(12) 黄前註書は、かかる「近似石敢当辟邪物」を含めて、台湾南部台南県の石敢当の基礎情報を網羅している。符仔頭や五宮符呪碑の情報は本書によった。

〔謝辞〕研修を受け入れていただいた厦門大学外文学院および同学院の呉光輝先生に厚く御礼を申し上げる。また、中国語の通訳には、川口市日中友好協会の井上不二子氏にお世話になった。